新競技規則
適用　初年度を終えて

（公財）日本ハンドボール協会　競技・審判本部

1

新　競　技　規　則

主な変更は，大きく４つ

1　スローオフエリア　※新設

2　パッシブプレーの予告合図後，パスの最大回数の変更

3　ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用　※新設

4　ボールサイズ（外周）について，松やにの使用の有無で分類　※新設

2

新　競　技　規　則　初年度

1）2022年7月1日より，国内全ての大会で実施すること

①ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用
（安心・安全な競技運営のため，国内全ての大会で運用することします。）

②ボールサイズ（外周）について，松やにの使用の有無で分類

2）2022年7月1日より運用について，各連盟の判断に任せること

①スローオフエリア（使用する か 使用しないか）

②パッシブプレーの予告合図後，パスの最大回数の変更（６回 または ４回）

3

新　競　技　規　則　2023年度の適用

2023年4月1日から運用について

①スローオフエリアの使用については，各連盟の判断に任せます。（継続）

②パッシブプレーの予告合図後，パスの最大回数は４回とします。

4

新競技規則変更のねらい

キーワード

「よりスピーディーに」「よりエキサイティングに」

「よりプレーヤーの安心・安全のために」

・2016年リオデジャネイロオリンピック以降，IHFは，60分間観衆を魅了するスピーディーなゲーム展開を求めてきた。

・その考え方を，「モダンハンドボール」という言葉で伝え，笛による試合の中断を可能な限り減らすためのレフェリングの工夫に取り組んできた。

5

新競技規則変更のねらい

・今回の競技規則改正により，
「モダンハンドボール」に加え，
よりスピーディーな魅力ある
ハンドボールを展開の追求。

・その中で，多くの得点が求められる際，防御するゴールキーパーの側に立った「安心・安全」の視点を追加したものである。

6

新競技規則変更のねらい

今回の競技規則改正　最大のポイント

- 『スローオフエリアの新設』
- 『パッシブプレーの予告後のパスの最大回数の変更』

まさに
「よりスピーディーに」
「よりエキサイティングに」を
競技規則に明文化したとも言える。

7

新競技規則適用 初年度から

○『スローオフエリアの新設』

・スローオフを走りながら実施できるようになることで得点後のスローオフがよりスピーディーになった。

→スローオフをするプレーヤー以外の位置に注意が必要。
センターラインよりも前に位置している時に再開の笛を吹いている。

→スローオフをするプレーヤーがボールを投げるタイミングに注意。
スローオフエリアから出ている。身体が…ボールが…。

8

新競技規則適用 初年度から

○『スローオフエリアの新設』

→スローオフをするプレーヤー以外の位置に注意が必要。
センターラインよりも前に位置している時に再開の笛を吹いている。

9

新競技規則適用 初年度から

○『スローオフエリアの新設』

→スローオフをするプレーヤーがボールを投げるタイミングに注意。
スローオフエリアから出ている。身体が…ボールが…。

10

新競技規則適用 初年度から

○『スローオフエリアの新設』

スローオフの完了とは…

- スローを行うプレーヤーの手からボールが離れ，さらにボールがスローオフエリアラインを完全に通過したとき。
- スローを行うプレーヤーからパスされたボールを，味方のプレーヤーがスローオフエリアの中で触れた，あるいはコントロールしたとき。

10の．6

（c）スローを行うプレーヤーは，スローオフが完了したとみなされるまで，身体のどこかが，絶対スローオフエリアラインを越えてはならない（18

不正なスロー
→相手チームのフリースローで再開

スローオフの完了前にスロアーがスローオフエリアから出ているため

11

新競技規則適用 初年度から

○『スローオフエリアの新設』

スポーツマンシップに反する行為

①

②

③

正しい位置にスロアーがたったため、レフェリーはスローオフの笛を吹いた。
その後、近くを通った相手チームのプレーヤーにボールを投げて、あたかもスローオフを邪魔されたかのように見せかけた。
（ボールを投げた先に味方のプレーヤーはいない。）

→スローオフをしたプレーヤーを退場とする。
相手チームのフリースローで再開する。

12

新競技規則変更のねらい

○『パッシブプレーの予告後のパスの最大回数の変更』

パッシブプレーの予告後のパスの最大回数が６回から４回に変更されることによって，
攻撃側は早くシュートをねらえる局面まで組み立てる必要がある。

→よりスピーディーな展開へ

13

新競技規則適用 初年度から

○『パッシブプレーの予告後のパスの最大回数の変更』

予告合図を示すタイミング

- フリースローの直後は示さない。
  →フリースロー後のパスを２～3回は見る。
- ボールを所持している選手が明らかな時に示す。
  →空中にある時だと、1回目がはっきりしない。
- 『あげます！』などの声かけは有効！
  →攻撃・防御双方にとって、分かりやすく誤解を招かない。
  『１・２・３…』『次が２回目！』

14

新競技規則適用 初年度から

○『パッシブプレーの予告後のパスの最大回数の変更』

パスの回数のカウント

15

4 回目のパスまで

例	攻撃側プレーヤー A1 の動き	防御側プレーヤー B の動き	攻撃側プレーヤー A2 の動き	競技の継続	判定
1	A2 へパス	ボールに触れていない	キャッチし ボールを コントロール	継続	パスとして カウントする
2	A2 へパス	ボールに触れた	キャッチし ボールを コントロール	継続	パスとして カウントする
3	A2 へパス	ボールに触れ/ボールを ブロックし、ボールは 攻撃 A1 に戻る	ボールに 触れていない	継続	パスとして カウントする
13	シュート	シュートを ブロックする	ボールをキャッチ	継続	パスとして カウントする
14	シュート	シュートを ブロックする	A1 がボールを キャッチ	継続	パスとして カウントする
15	シュート	選択がない	ボールをキャッチ	継続	パスとして カウントする

16

4 回目のパスの後

例	4 回目のパスを キャッチした A1 の動き	防御側プレーヤー B の動き	攻撃側プレーヤー A2 の動き	競技の継続	判定
1	シュート	何もしていない	ボールをキャッチ	B チームの フリースロー	パッシブプレーの 終了
2	シュート	ボールに触れた	ボールをキャッチ	継続	あと 1 回の パスが許される
3	シュート	シュートを ブロックする	ボールをキャッチ	継続	あと 1 回の パスが許される
4	シュート	シュートを ブロックする	A1 がボールを キャッチ	継続	あと 1 回の パスが許される
5	シュート	シュートをブロックし、ボールはサイドライン/アウトオブボールラインとしてコート外へ出る	何もしていない	A チームの スローイン	あと 1 回の パスが許される
6	シュート	A1 へファール	何もしていない	A チームの フリースロー	あと 1 回の パスが許される

17

D3 パスの最大回数に関して

D3a 4 回目のパスを行う前まで

- パッシブプレーの予告合図の後， レフェリーが攻撃側チームに対し， フリースローやスローインを判定したならば， パスの回数をカウントしない。
- パスやシュートが防御側プレーヤーにブロックされ， そしてボールが再び攻撃側チームに戻ったならば（ゴールキーパースローになった場合も含む）， パスの回数のカウントを継続する（付録 4 を参照）。

D3b 4 回目のパスの後

- 攻撃側チームにフリースロー， スローイン（もしくはゴールキーパースロー）が， 4 回のパスの後に与えられたならば， 攻撃側チームには攻撃を完了させるためあと 1 回のパスが許される。
- 4 回のパスの後に打ったシュートが防御側チームにブロックされ， そのボールが直接攻撃側プレーヤーに戻ったならば， もしくはサイドラインやゴールラインからコート外へ出たならば， 攻撃側チームには攻撃を完了させるため， あと 1 回のパスが許される。

18

新競技規則適用 初年度から

◯『パッシブプレーの予告後のパスの最大回数の変更』

予告合図の後、5回パスをしている。
→シュートの前にパッシブプレーの判定が正しい。

予告合図をするタイミング
→『あげます！』と言っているが，ボールの所持がより明確な時にあげると良い。

19

新競技規則適用 初年度から

☆その他　パッシブプレーに関わって

予告合図の後、DFのファールを許容してしまうケース（プレーを流してしまう）に注意！
→攻撃側にフリースローの判定が正しい。

予告合図の後、パスを３回行ったところでフリースローの判定。攻撃側チームは、直接のシュートを選択。
→フリースローでDFの顔面にボールをぶつけたため、失格とする。

20

新競技規則変更のねらい

◯『ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用』

- 従来は，ゴールキーパーの頭部へボールをぶつける行為について，７mスローの時のみ失格を適用するかどうかの判断しかできなかった。
- スピーディーな展開が繰り広げられていく中で，当然ながら得点機会も多くなる。ゴールキーパーへの負担もこれまで以上に考慮していかなくてはならない。

21

新競技規則変更のねらい

◯『ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用』

今回の改正によって，従来の７mスローの時の失格の適用に加え，ゴールキーパーと１対１の状況で，ゴールキーパーの頭部へボールが直撃した場合，2分間退場の適用という選択肢が増えることになる。

シューターにとって，ゴールキーパーの頭部付近へシュートを安易にねらえない心理的な歯止めとなるとともに，ゴールキーパーの頭部にボールをぶつけないようにシューターには回避義務があることを明文化したとも言える。

22

新競技規則適用 修正

◯『ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用』

どのカテゴリーも適用したが，想像していたよりも多い事象が起きた。
それだけ，GKは危険にさらされている状況で，改正の必然性を感じた。

※昨年度，通達の内容を年度途中に修正・追加した箇所の確認。

変更前：『明らかなシュートチャンスの状況で』
↓
変更後：『ゴールキーパーと１対１の状況で』

※シュートの局面をより明確な表現にするため。
ラインクロス，オーバーステップでボールの所持が変わる判定後のシュートも含まれる。

23

新競技規則適用 修正

◯『ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用』

※昨年度，通達の内容を年度途中に修正・追加した箇所の確認。

『ゴールキーパーの頭部に直撃』
↓
追加：ゴールキーパーの『頭部』とは，

いわゆる顔面を含めた頭部と解釈する。

24

新競技規則適用 修正

○『ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用』

※昨年度，通達の内容を年度途中に修正・追加した箇所の確認。

変更前：『罰則を適用しない場面の例』右側の場面
↓
変更後：『罰則を適用する場面の例』右側の場面
※IHFからの追加の情報から，
ボールの方向へ動くことの解釈は，
『頭部のみをボールの方向へ動かすこと』ととらえる。

※正しくは，左側の例は罰則を適用しない。右側の例は罰則を適用する。

25

新競技規則適用 修正

○『ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用』

※昨年度，通達の内容を年度途中に修正・追加した箇所の確認。

ボールの方向へ動くことの解釈は，
『頭部のみをボールの方向へ動かすこと』ととらえる。

ゴールキーパーの通常の防御動作で
頭部にボールが直撃すれば，罰則を適用するということ。

ゴールキーパーの体が動いていたか，
止まっていたかが問題ではない。

26

新競技規則適用 初年度から

○『ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用』

コートレフェリーとゴールレフェリーの共同作業

- ゴールレフェリーが近すぎる、またはGKの背中によって
  GKの頭部にシュートされたボールが直撃したかどうか
  見えにくい場合がある。
  →コートレフェリーの位置の方が、上から（正面から）
  見えやすいため、サポートしていく。

27

新競技規則適用 初年度から

ゴールキーパーの頭部にボールが直撃したことに対する判断基準

- ゴールキーパーと１対１の状況で，たとえディフェンスに接触されたとしても，
  ボールと体をコントロールできていれば（Play on:競技の継続とレフェリーが
  判断），シュートしたプレーヤーに罰則を適用する。

28

新競技規則適用 初年度から

良い判定
→退場

１対１の状況ではない。
→退場の判定はできない

１対１の状況。
GKは通常の防御動作。
→退場の判定が正しい

例え、フリースローの判定後
であったとしても、１対１の
状況である。
→退場の判定が正しい、
ただし、攻撃側の
フリースローで再開する。

レフェリーの事実判定が重要
①DFのプッシングであれば、
→７mスロー→DFの退場
②DFのプッシングがなければ、
→シューターを退場
GKチームのフリースローで再開

29

新 競 技 規 則 2023年度の適用

2023年4月1日から（追加事項）

スローに関して

２つのクリップ映像ともスローのやり直しが正しい。

15の1

【注】　スロー（ゴールキーパースローを除く）を実施する前に，
スローを行うプレーヤーは，立っていなければならない。立つとは，
足以外の身体の部位が床に触れてはならないことを意味する。

30